

境界としての猫

——動物とヒトとの共生を考えるために——

学習院大学 遠藤薫

1. はじめに（目的）

東日本大震災は我々の社会に隠れていた問題を明るみに出した。その一つが、動物との共生の問題である。福島原発事故の周辺地域では、住人たちが強制的に移住させられ、飼われていた動物たちの多くは現地に放置された。時間がたった現在、残された動物たちは野生化し、住民の帰還を妨げる要因ともなっている。それだけではなく、野生動物が増え、離れた地域にも出没して、農作物にも被害が出るようになった。さらに現在、人口縮小の流れのなかで、野生動物の人間社会への侵入は、都会でも問題化している。自然 - 社会空間における人間と動物の関係がいま改めて問われようとしているのである。

2. 猫と人間／共同体（方法）

動物と人間の共生を考える上で重要な論点を提示するのが、猫という存在である。近年、猫ブームといわれるほど猫に対する関心が高まっている。それは、従来もっとも愛玩動物として多かった犬と比べても、猫が現代の環境条件のなかで、人間と同じ空間に共棲しやすい特性を備えているからであろう。猫と人が同じ空間に棲むということは、個別の猫と個別の人との関係で閉じず、猫と共同体との関係に目を向ける必要がある。現代の「社会内存在」としての猫のあり方は、大きく、飼い猫、名物猫、地域猫、観光猫、野良猫にわけられよう。そのそれぞれについて検討することから、考えてみたい。

3. 境界としての猫（結果）

猫と人とは、相互依存性と相互自律性とを適度に配合した共棲の営み方を創り出している。遠藤（2017）で論及したように、今日のように猫が日本社会に融けこんだ存在になったのは、近世における猫の「公共財化」があったためである。猫は社会内存在であるとともに、自然からの来訪者でもある。この境界性によって、今日ますます猫は人間たちを引き寄せている。

4. 「重要な他者」としての動物たち（結論）

猫という種の持つある種の境界性が、人間と猫との共生を可能にしている。とはいえ、そのバランスは実はかなり微妙でもある。前項で考察した猫との共棲形態も、それぞれにリスクをはらんでいる。（リスクが顕在化し、社会問題化した例も多い）。

また、他の動物との共生と、猫との共生を短絡的に結びつけることも難しい。それでも、ハラウェイが示唆するように、人間は動物たちの「重要な他者性」にたって、彼ら／彼女らとの「異種協働」を探っていくことが不可欠である。

参考文献

- 遠藤薫 2017 「近世における都市一農村・日本 - 世界の文化的交差〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム」『学習院大学法学会雑誌』53-1号
- 遠藤薫 2018 「幕末から維新时期における社会変動と大衆の無意識一招き猫と化け猫騒動一」『学習院大学法学会雑誌』54-1号
- 遠藤薫 2018 「猫の島から東日本大震災を考える - 越境する社会・越境する知」『学術の動向』2018年4月号
- 遠藤薫 2018 「猫をかぶった猫たちへ」『Wendy-Net』(<https://www.wendy-net.com/nw/essay/353.html>)
- 遠藤薫 2019 「目白と猫と太田道灌：野生との共生は可能か？」坂本孝治郎・編『エッセイコレクション2018』
- Haraway, D., 2003, *The Companion Species Manifesto: Dogs, People, and Significant Otherness*, Prickly Paradigm Press. (永野文香・波戸岡景太訳、2013、『伴侶種宣言——犬と人の「重要な他者性」』、以文社)